

530 アルツハイマー病における局所脳血流量の測定
森田浩一, 小野志磨人, 大塚信昭, 永井清久, 安田 雄,
寺尾 章, 福永仁夫(川崎医大 核, 神経内科)

アルツハイマー病(AZD)におけるSPECT像の報告は多く、頭頂葉から後頭葉にかけての血流低下が指摘されている。しかし、局所脳血流(rCBF)を定量し、高分解能SPECT装置を用いた詳細な検討は少ない。今回我々は動脈血採血を用いたrCBF測定をAZD 15例に行ったので報告する。約半数例では頭頂後頭移行部の血流低下が他部位より先行し、残りの症例では前頭葉の血流低下が先行した。また、病期が進行するに伴い、rCBFの低下の程度も強くなり、低下範囲も一次運動、感覚野を除く全大脳半球に拡大した。さらに、病初期にはrCBF値が正常より20~30%程度高値を示す症例を経験したが、これは検査に対する精神的な負荷が原因として考えられた。

531 アルツハイマー型痴呆のSPECTによる鑑別診断

浅野哲一, 羽生春夫, 阿部晋衛, 新井久之, 高崎 優(東京医科大学老年科), 鈴木孝成, 阿部公彦, 網野三郎(同放射線科)

近年、PETやSPECTなどの三次元的局所脳循環代謝測定法を用いて、アルツハイマー型痴呆の臨床診断における有用性が報告されている。本研究では、アルツハイマー型痴呆に比較的特徴的とされる側頭頭頂葉の異常について、その特異性を明らかにするため健常高齢者やさまざまな神経疾患患者についてSPECTを用い検討した。脳血管性痴呆やパーキンソン病の一部、さらに比較的稀ではあるが正常圧水頭症や筋萎縮性側索硬化症などの神経変性疾患の一部でも同様の局所的異常が観察され、鑑別診断として重要であると考えられた。しかし、健常高齢者で同様の変化が認められることは極めて稀であると考えられた。